

# 萌えの向こう側

小倉 一純

工場萌えの女子たちは、ただ単に工場群の夜景がきれいだから、惹かかれているのではないと思う。

工場にある建物はふつう「建屋」と呼ばれている。その建屋の屋根や外壁などはスレートの波板でできている。石膏ボードに近い感じの素材だ。それに経年の汚れが染みついて、なんともいえず地味な佇まいである。<sup>たたず</sup>

家電やクルマや一般住宅のような、カラフルさや派手さはない。流行を追いかけるなどというマインドも少しもない。

工場というのは質実剛健だ。生産現場だから、コストをとても重要視する。女性のおしゃれ感覚とは程遠い世界だ。

どんな新しい物を作っている工場も、昔のままの外観である。まるで昭和時代の遺物のようだ。

工場は実は社会主義である。従業員たちは皆、労働組合に所属し、春闘で労働者の権利を勝ちとる。

資本主義の日本社会において、工場の中だけは、マルクス主義の世界観に裏打ちされている。

そんな諸々の違和感が、工場萌えの女子たちの心に映えるのではないだろうか。

彼女たちは意識していないかも知れないが、工場に数多ある饒舌な夜間照明の向こう側のそんな違和感こそ、彼女たちの萌えの核心なのかも知れない。

僕はかつて大学を卒業して、工場に配属となつたが、当時は工場のそんな違和感に戸惑い、中々馴染むことができなかつた。

だが強烈な印象を放つものには、時を経るに従い、良きにつけ悪しきにつけ、愛着を持つものらしい。

今では僕はそんな工場が好きで堪らない。